環境事始　　八帖　　石油コンビナートの建設

コンビナートはロシヤ語が起源だそうだ。昭和 30 年から 40 年代、石油化学が基幹産業になりつつあった。最初は勿論工場は汚く、煙と廃水、それにファイアストックの火炎まで加えて、それが発展のシンボルと見えたけれど、やがて脱硫、廃水処理が進展して世界屈指の清浄な工業地帯が完成していった。日本は第二の経済大国になったが、それと共に海と空の汚染を払拭した。生産向上は環境破壊のリスクを伴うなどの不逞識者の言は結局は嘘に終った。汚染を出すようでは未だ産業発展は途中なのだ。その頃のお話、鹿島灘の松原の海岸にコンビナートを作る計画で事前の環境調査があった。先生はまだ何もない砂丘で大気汚染を調べた。まず現地に行くのが一日掛り、鉄道も舗装道路もない。田舎道を車で走ると砂塵を捲上げて、後続車は外も見えない。西部劇さながらの状景であった。それよりも県の役職を集めての説明会の方が先生には圧巻に思えた。何しろこの構想は茨城県の鉱工業生産の 1.5 倍を加えるのだから尋常ではない。旅館だか公民館だかの大広間で厚生省の深谷守平課長が挨拶して協力をお願いする。国の課長は地方自治体の局長にも相当する権限だから、一同江戸城に伺候した諸大名然ハハーと平伏して摺足でお流れ頂戴という具合。ただ長老の衛生研究所長だけ対等に談笑していた。この場面を見聞きすると役人が汚職して国を傾けるのも当然と思えるし、逆に生産を倍増してかつ環境破壊を終焉させるのも亦容易ではないかとも思えた。今日コンビナートが安全に稼動しているのは後者の機能が働いたのだろう。鹿島はその後行くことはないが、市原には調査で長く関係した。ここは東京湾岸日本最大級の石油化学工場群、半休先生は市原市の委員として 30 工場を対象に大気調査を続けてきた。別に敷地内に入らなくても工場から漏洩しているガスは凡て把握できる。市では毎年の分析結果に基いて汚染度ワースト 3 の工場に対する注意勧告を慣例としたのである。未知の成分の発見もあった。例えばシクロオクタジエンなど教科書にない物質だった。またエチレンは石油製品の原料で主生産ガスだから工場側は洩らす筈はないと主張するが大気中恒常的に認められた。多量に放出すれば爆発の危険がある故安全上そのチェック機能は欠かせない。そのため先生達は調査の精度を図る。例えばエチレンは自動車排気にも含まれ、どちらからの発生かは正確でない。但石油化学ではアセチレンは扱わないので排気ガス中両者の存在比を決定して置きその分補正すればよい。大体コンビナート領域の発生量は工場と車とほぼ半々だった。ま、こんな具合にして激甚汚染を監視してきたのが重大事故の防止に繋がったと思っている。今日各地のコンビナートは生産を増やすこともなく、減らすこともなく黙々と日本の暮らしを支える役目を務めているかに見える。これは生産活動による公害を抑止した重要な実績であろう。先生達は戦争に勝ちそして負けた。生活のどん底から豊かな暮らしを築いた。コンビナートの赤潮と煙と蒸気と火炎の騒乱を経て今の平静を看てもきた。即ち栄枯盛衰、諸行無常を知っている世代である。この体験から学んだ能力とは、それは地球規模の環境崩壊の危機が迫る報道に接して、その対応が朧げに想像できることだ。詰まる所国政の節々に悪党と善人とが居て、前者が昌蕨して貧困国となり後者の復権があって理想境を築ける簡単な筋書である。